

教育実地研究生の英語運用能力と英語指導力との関係を探る

— 各校における教育実地研究の現状調査をもとに —

代表者氏名：前田 健士¹⁾

阿部 始子²⁾ 白倉 美里²⁾ 粕谷 恭子²⁾ 高山 芳樹²⁾ 馬場 哲生²⁾ 中村 香³⁾ 石毛 隆史⁴⁾
乾 莉可⁴⁾ 入野 美沙⁴⁾ 久保 幸恵⁴⁾ 早川 聡⁴⁾ 市林 竜⁵⁾ 菊池 智美⁵⁾ 森 美穂⁵⁾
青柳 有季⁶⁾ 大里 信子⁶⁾ 末岡 敏明⁶⁾ 金枝 岳晴⁷⁾ 中川千香子⁷⁾ 松津 英恵⁷⁾ 石崎 智子⁸⁾
久野あゆ美⁸⁾ 熊木 孝太⁸⁾ 菅野 晃⁸⁾ 瀬戸口亜希⁸⁾ 外山 徹⁸⁾ 根本 賢一⁸⁾ 保戸塚由紀子⁸⁾
光田怜太郎⁸⁾ 秋森久美子¹⁾ 雨宮 真一¹⁾ 上木多加志¹⁾ 後藤 葵¹⁾ 小松 万姫¹⁾ 澤田光穂子¹⁾
手塚 史子¹⁾ 徳 初美¹⁾ 中野 千恵¹⁾ 藤野 智子¹⁾ 木村 有里⁹⁾ 西尾 真弓⁹⁾ 渡邊 聡⁹⁾
青木ひかり¹⁰⁾

- 1) 東京学芸大学附属国際中等教育学校
- 2) 東京学芸大学英語科教育学分野
- 3) 東京学芸大学附属小金井小学校
- 4) 東京学芸大学附属大泉小学校
- 5) 東京学芸大学附属世田谷中学校
- 6) 東京学芸大学附属小金井中学校
- 7) 東京学芸大学附属竹早中学校
- 8) 東京学芸大学附属高等学校
- 9) 東京学芸大学附属特別支援学校
- 10) 埼玉県所沢市立小手指中学校

目 次

1. 背景	56
2. 研究の手順	57
3. 結果	59
4. 考察	63
5. 大学の教育実習事前指導のあり方	66
6. 結論	68

教育実地研究生の英語運用能力と英語指導力との関係を探る

— 各校における教育実地研究の現状調査をもとに —

代表者氏名：前田 健士¹⁾

阿部 始子²⁾ 白倉 美里²⁾ 粕谷 恭子²⁾ 高山 芳樹²⁾ 馬場 哲生²⁾ 中村 香³⁾ 石毛 隆史⁴⁾
乾 莉可⁴⁾ 入野 美沙⁴⁾ 久保 幸恵⁴⁾ 早川 聡⁴⁾ 市林 竜⁵⁾ 菊池 智美⁵⁾ 森 美穂⁵⁾
青柳 有季⁶⁾ 大里 信子⁶⁾ 末岡 敏明⁶⁾ 金枝 岳晴⁷⁾ 中川千香子⁷⁾ 松津 英恵⁷⁾ 石崎 智子⁸⁾
久野あゆ美⁸⁾ 熊木 孝太⁸⁾ 菅野 晃⁸⁾ 瀬戸口亜希⁸⁾ 外山 徹⁸⁾ 根本 賢一⁸⁾ 保戸塚由紀子⁸⁾
光田怜太郎⁸⁾ 秋森久美子¹⁾ 雨宮 真一¹⁾ 上木多加志¹⁾ 後藤 葵¹⁾ 小松 万姫¹⁾ 澤田光穂子¹⁾
手塚 史子¹⁾ 徳 初美¹⁾ 中野 千恵¹⁾ 藤野 智子¹⁾ 木村 有里⁹⁾ 西尾 真弓⁹⁾ 渡邊 聡⁹⁾
青木ひかり¹⁰⁾

- 1) 東京学芸大学附属国際中等教育学校
- 2) 東京学芸大学英語科教育学分野
- 3) 東京学芸大学附属小金井小学校
- 4) 東京学芸大学附属大泉小学校
- 5) 東京学芸大学附属世田谷中学校
- 6) 東京学芸大学附属小金井中学校
- 7) 東京学芸大学附属竹早中学校
- 8) 東京学芸大学附属高等学校
- 9) 東京学芸大学附属特別支援学校
- 10) 埼玉県所沢市立小手指中学校

1. 背景

教員養成を行うための教育実地研究（以下、教育実習）の指導において、附属学校は重要な使命を担っている。本学附属学校英語科では、9月から10月にかけて、中学高校課程志望の大学3年生の教育実地研究生（以下、実習生）、小学校課程志望の大学4年生の実習生をそれぞれ受け入れている。中学高校課程志望の学生はほとんどが英語教育を専攻している。その一方で、小学校課程志望の学生は、数年前については小学校課程の英語教育専攻ができたが、それ以前は英語教育以外の専攻者であったため、中学、高校で教科指導をするにあたり、英語や英語教育についての専門性が課題となる実習生も少なくなかった。そのような中で、「授業者による英語の発話に誤りが多い。」「指導案作成の段階で、担当の教諭が丁寧に指導しても改善されない。」など、一部の学生の指導力不足や英語教師としての専門性の不足が指摘されることがしばしばあり、その多くは小学校課程（英語教育以外の専攻者）の実習生であった。その原因として、学生本人の英語運用能力の問題、英語そのものについて専門知識の不足の問題、教員としての資質の問題など、様々な要因が予測された。

そこで、実習生を受け入れる附属学校の教員と、教育実習の事前事後に渡り学生の指導を行う大学の教員との間で情報交換を重ね、最近数年の実習生たちの英語指導力（教育実習期間中の様子や成績）と、英語運用能力を調査し、研究をすすめることにした。

2. 研究の手順

2. 1 先行研究

これまでに英語科の実習生の英語運用能力、および英語指導力（英語教授力）について研究した先行研究は以下の通りである。

(1) 神保尚武 2006

英語教育実習の実態、中・高の教育現場が求める英語科実習生像、教育実習期間長期化の課題を明らかにするために、実習生の受け入れ校を対象に調査を実施し、結果を「英語科教育実習の実態と今後の教職課程の課題」としてまとめた。

(2) 山崎朝子 2006

神保（2006）の研究をもとに、大学での教員養成課程の実態調査、また実習生の実習校を対象とした実習についての意識調査、都道府県や政令指定都市の教育委員会を対象とした「採用にふさわしい英語科教員像」についてのアンケートによる調査を行い、アジア諸国の教員養成事情と比較しながら、日本の教員養成制度の問題について言及している。

上記の2つの先行研究を踏まえ、本研究では実習生の英語運用能力と英語指導力について、直接的な形で調査を進めることにした。

2. 2 資料の検討

まず実習生の英語運用能力と英語指導力を測るにあたり、それぞれどのような資料を用いるかについて、検討を行った。

2. 2. 1 英語運用能力の測定について

英検、TOEIC など、社会一般で英語力の指標や資格として用いられるさまざまな検定試験があるが、本研究では、本学のB類英語科の授業で最近数年の間、継続して活用していたVELC Test を用いることにした。

VELC Test を採用することとした理由は以下のとおりである。

今回の研究で実習生に受検させるにあたり、大学の英語科教育法の授業や実習期間中の放課後の時間を利用して実施することを考え、VELC Test を使用すれば70分で実施できるため、実習生にとっても負担は少ない。

実習期間中の授業ではスピーキング力、また指導案作成でTeacher Talkを書く際のライティング力も当然必要とされ、本来はそれらも実習で必要とされる英語運用能力ではある。本研究で英語運用能力の指標としたVELC Testは、リスニングとリーディングの2つのパートで構成され、それぞれのパートでの得点と、全体の得点と報告されるため、スピーキング、ライティングに関する運用能力は示されないことになる。しかし従来から使用されているその他の検定試験等では、内容が大学生にそぐわないなどの問題も多い。VELC Testでは、4技能のうち、受容に関わる2技能を対象とし、それぞれの技能で把握できる語彙サイズやまとまった長さの英語の情報を理解できる力など、日本人大学生にとって特に大事と考えられる2つの技能に関する下位技能を測定する内容となっている。その他、VELC Testはこれまで本学の英語科教育法の授業で活用され、難易度等についても、日本の大学生の実態に合わせて開発されたテストであり、信頼性係数も非常に高いことなども含めて検討した結果、VELC Testでの総合得点を、実習生の英語運用能力を表す資料として採用することとした。VELC Testの詳細については、静哲人（2013）を参照されたい。

なお、VELC TestではおおよそのTOEICテストの予測スコアが受験者に示され、TOEICのスコアと比較することができる。VELC Testのホームページによると、VELC TestとTOEICのおおよその換算表並びに注記

は以下の通りである（表1）。

表1 VELC-TOEIC 換算表

VELC スコア（総合）	TOEIC（トータル）
300	205
400	330
500	450
600	575
700	700
800	820

- ・ TOEIC の予想スコアは、VELC Test のセクションスコアをもとにしたより精緻な式で算出されるため、この表とは完全には一致しません。
- ・ VELC スコアをもとにした TOEIC の予測スコアには、リスニング、リーディングではいずれも平均して約50点の誤差が、2つを合計した総合予想点には平均して約85点の誤差が見込まれます。

2. 2. 2 英語指導力の測定について

実習生の英語指導力を測定するにあたり、各附属学校で共通した資料として残されているものが、東京学芸大学の教育実習で、実習校から大学への報告書として提出している「東京学芸大学教育実習成績報告書（資料1）」（以下、成績報告書）である。本研究ではそれを英語指導力の指標として活用することとした。

この成績報告書に記載する主な事項は、以下の通りである。

- ・ 5つの評価項目（学習指導に関する3項目、生活指導・生徒理解に関する1項目、勤務態度に関する1項目）を5段階（1～5）で評価する評定
- ・ 原則としてその5項目の評定の合計から割り出される、5段階（A～E）で表される総合評価
- ・ 成績報告書記載者による記述の所見（教科指導、生活指導を含む総合的な内容）

上記の3種類のデータのうち、英語指導力に直接関わってくる項目は「5つの評価項目」のうちの学習指導に関する3項目（「Ⅰ教材研究」、「Ⅱ指導計画の立案」、「Ⅲ学習指導と評価」）であると判断し、3項目の評定の合計点15点を各実習生の英語指導力を表す数値とした。また5段階で表される総合評価は各段階の幅が均等ではないため、今回の分析には不向きであると考えた。

2. 3 データの収集と活用

本研究において、分析の対象とする実習生は、2011年度から2014年度の4年間の附属中学3校、附属高等学校、附属国際中等教育学校での実習生としている。

2. 3. 1 分析シートの作成

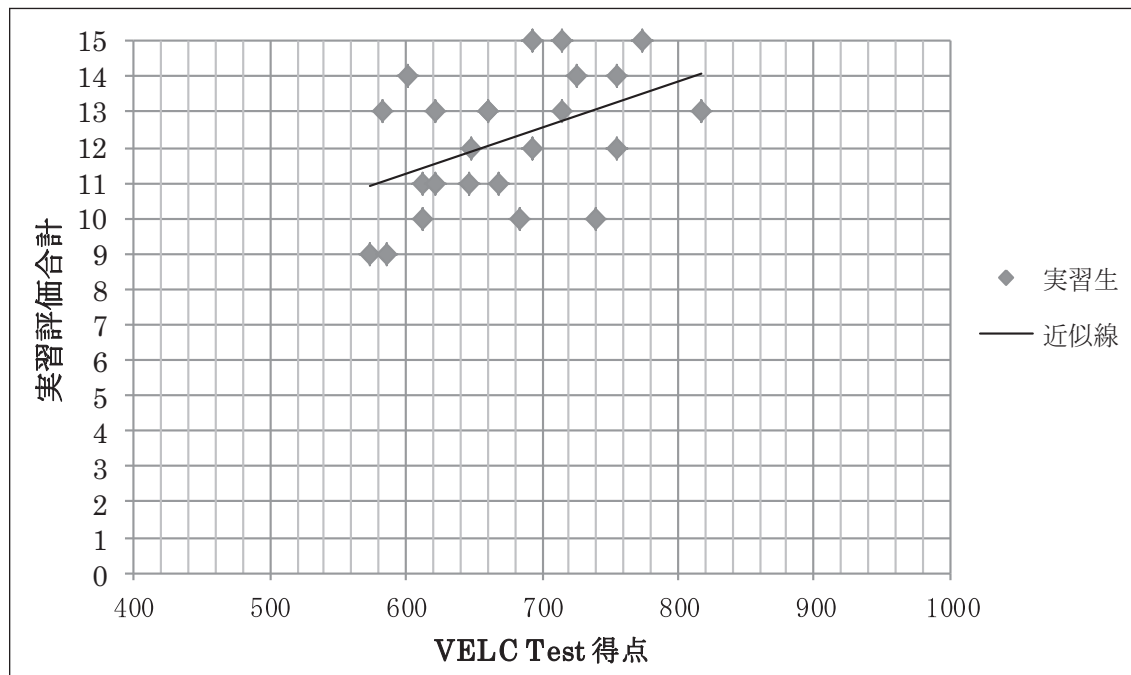
VELC Test の得点と成績報告書の教科に関する3項目の評定の合計での相関を見たところ、緩やかな傾向が見られた学校と、結果がばらつく学校とに分かれた。そのため、英語指導力を支える要因として、英語運用能力以外のものも考えられることを想定し、生活指導・生徒理解、勤務態度の評定も、分析の参考とするために記入する欄を設けた。また英語運用能力についても、今回の研究で用いた VELC Test の総合得点だけでなく、より汎用性の高い TOEIC の相当点を記載するレイアウトにした。そのようなプロセスを経て、最終的な形（資料2）になった。

3. 結果

英語指導力と英語運用能力の相関関係をみるのに、3校種（中学校、高校、国際中等教育学校）に分けてVELC Testの得点と成績報告書の教科に関する3項目の評定（以下、実習評価）の合計をもとに分析した。

まず、2014年単独の、全校種を合わせた分布図は（図1）のようになった。VELC Testの得点と指導教員による実習評価の間の相関係数は0.464と、統計的に有意な中程度の相関があることが確認された。教育実習全般的な傾向として、VELC Testで630～640点を境に、その前後で相関関係の傾向がそれぞれ特徴的になっている。

図1 全附属学校（中学校3校、高校、国際中等教育学校）2014年度 VELC Test 得点と実習評価の相関



【VELC Test 得点と実習評価の相関係数】 = 0.464（+1.0を正相関の最大値とする）

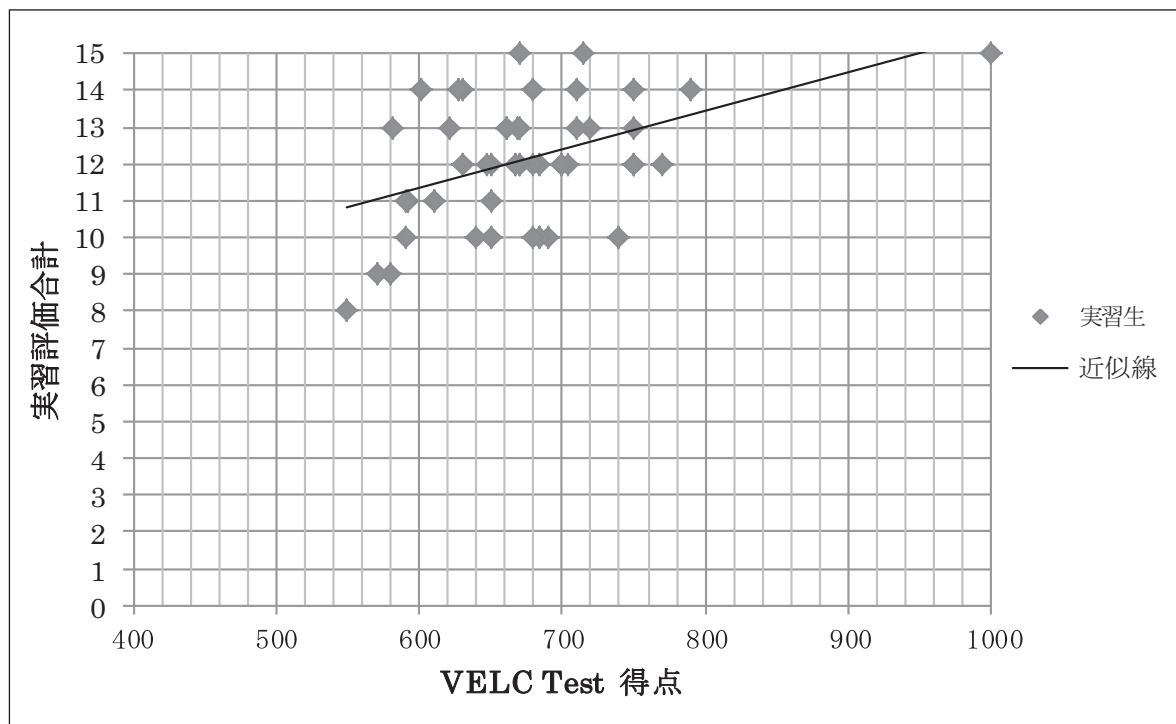
以下、学校種ごとに結果を示す。

3. 1 附属中学校3校（附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校）

2011～2014年度の附属中学校3校での実習生のVELC Testの得点と実習中の実習評価の相関は以下の（図2）のようになった。相関係数は0.462となり、統計的に有意な中程度の相関があることが確認された。各実習生のVELC Testの得点と実習評価および成績報告書3項目の各評定は（表2）の通りである。ただし、個人特定を避けるため、VELC Testの得点は1の位を四捨五入した得点を記載することとした。

相関分析の結果、2014年度の全附属学校を対象とした相関（図1）で示された相関係数に非常に近い相関関係が見られた。また、本プロジェクト研究【1年次】【2年次】を通して比較しても、同様の相関関係の結果が得られた。よって、附属中学校3校での実習生のデータからは、英語運用能力の高い実習生は、教科指導力においても比較的高い評価を得られる傾向にあると言える。

図2 附属中学校3校 2011～2014年度 VELC Test 得点と実習評価の相関



【VELC Test 得点と実習評価の相関係数】 = 0.462 (+1.0を正相関の最大値とする)

表2 2011-2014年度附属中学3校における実習生の VELC Test の得点 (※)、実習評価合計、成績報告書の3項目の各評定
(※個人特定を避けるため、1の位を四捨五入処理)

附属中学校3校 2011～14年度 実習生データ：

VELC Test 得点、実習評価合計、成績報告書の3項目の各評定

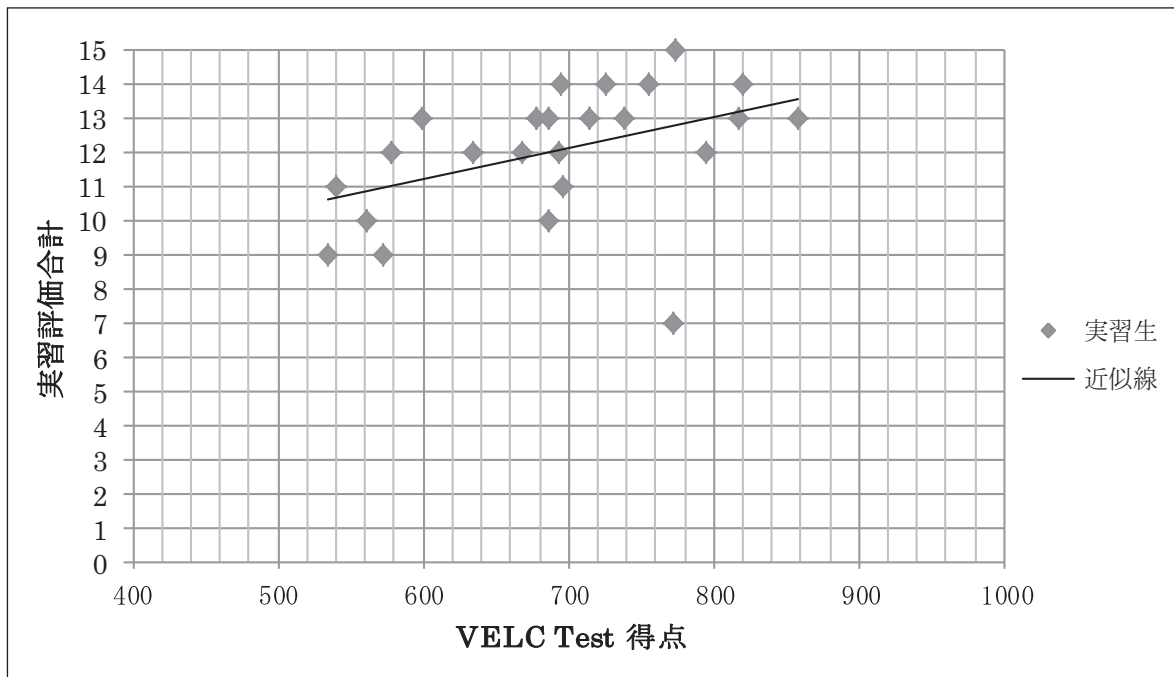
VELC Test 得点	実習評価合計	I 教材研究	II 計画立案	III 学習指導と評価
1000	15	5	5	5
790	14	5	4	5
770	12	4	4	4
750	12	4	4	4
750	13	4	4	5
750	12	4	4	4
750	14	4	5	5
740	10	3	3	4
720	13	5	4	4
720	15	5	5	5
710	14	4	5	5
710	13	5	4	4
700	12	4	4	4
700	12	4	4	4
700	12	4	4	4
690	10	4	3	3
680	12	4	4	4
680	10	4	3	3

680	12	4	4	4
680	14	4	5	5
680	14	4	5	5
680	10	3	3	4
670	13	4	4	5
670	15	5	5	5
670	12	4	4	4
670	12	4	4	4
670	13	4	4	5
670	12	4	4	4
660	13	5	4	4
660	13	4	5	4
650	10	4	3	3
650	12	4	4	4
650	11	4	4	3
650	12	4	4	4
640	10	3	4	3
630	12	4	4	4
630	12	4	4	4
630	14	5	4	5
630	14	5	4	5
620	13	5	4	4
610	11	4	3	4
610	11	4	3	4
600	14	5	4	5
590	11	4	4	3
590	11	4	4	3
590	10	4	3	3
580	13	5	4	4
580	9	3	3	3
570	9	3	3	3
550	8	3	3	2

3. 2 附属国際中等教育学校

2011～2014年度の附属国際中等教育学校での実習生のVELC Testの得点と実習評価の相関は以下の(図3)のようになった。相関係数は0.44となり、統計的に有意な中程度の相関があることが確認された。各年度によって相関係数にばらつきは見られたものの、4か年のデータをまとめると、他の学校種と同様の相関関係が見られる結果となった。

図3 附属国際中等教育学校 2011～2014年度 VELC Test 得点と実習評価の相関

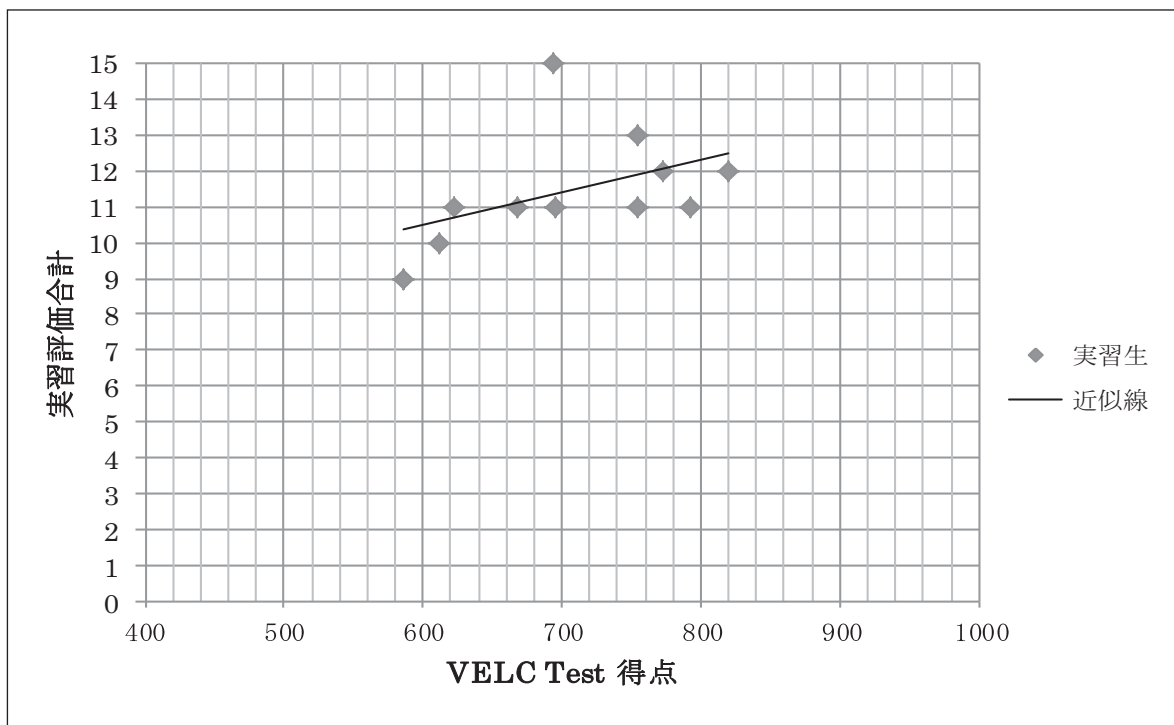


【VELC Test 得点と実習評価の相関係数】 = 0.44 (+1.0を正相関の最大値とする)

3. 3 附属高等学校

2011～2014年度の附属高等学校での実習生の VELC Test の得点と実習評価の相関は以下のようになった (図4)。相関係数は0.45となり、統計的に有意な中程度の相関があることが確認された。

図4 附属高等学校 2011～2014年度 VELC Test 得点と実習評価の相関



【VELC Test 得点と実習評価の相関係数】 = 0.45 (+1.0を正相関の最大値とする)

4. 考察

実習生の VELC Test の得点で示された英語運用能力と教科に関わる実習評価から見られる英語指導力の間には、中程度の相関関係が見られた。しかし、各校で得られたデータをもとに、実習担当教員による実習生の所見報告をまとめた結果、英語指導力に大きく影響していると考察される要因として、学生本人の人柄、学習態度、教授体験（教材開発、生徒へのインストラクション、クラス・マネージメント、振り返りと考察等）が挙げられた。これらはどの学校種でも同様に見られる傾向にあった。

「英語指導力」を向上させるために必要な「英語運用能力」に加え、「教師としての資質、授業指導力」をどのように指導すればよいのか。「3. 結果」で得られた分析結果をもとに、実習担当教諭による具体的な助言例を含め、学校種別に考察を以下に述べる。

4. 1 附属中学校（附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校）

【1年次】

相関が見られる要因として、英語運用能力が弱い学生は、指導案作成の段階から準備に時間もかかり、実際に授業を進める際も、指導案に書かれていることをこなすだけで精一杯の状態であり、余裕がない。そのため、英語運用能力の高い学生と比べ、悪循環になることが多く、結果的に英語指導力の評価も低かったと考えられる。

英語指導力を保証するための英語運用能力の下限が、VELC Test の630～635点ではないかというおおよその見当がつけられた。635点という得点は、英語教員としては決して高い得点ではないが、教材研究や指導案作成などの準備を入念に行い、生徒たちにしっかり対応すれば、それよりもやや英語運用能力の高い学生にも劣らない英語指導力を発揮することができる。しかし、630点を割り込むと Teacher Talk や指導案で用いられる英語に誤りも目立つようになるなど、英語指導力に問題が出てくると考えられる。

【2年次】

17名中、VELC Test 580点台～640点台の学生6名において、評価が他の学生より低くなるという結果が見られた。それらの学生への指導教諭のコメントと考察を以下に示す。

- 指導に必要な英語力に不十分な点はないが、生徒への反応、受動的な姿勢にやや不十分な点が感じられる。（実習生の英語力が、授業をする際の本人の自信や気持ちの余裕に影響を与えているかもしれない。）
- 英語力に不安があり、良いモデルを示したり、指示を与えるのに大変苦勞していた。（英語力に関する不安が指導面の評価（5段階の3）に直接影響していると思われる。）
- 安心して授業に臨める温かい雰囲気を作り、必要であれば毅然とした態度を取ることができる。（学習指導面では最高評価（5段階の5）であった。）

その他の実習生に関して評価できる特長として「意欲、向上心」、「指示が安定していること」、「適切な導入や説明」が挙げられた。

【3年次】

附属中学校3校の4年間で得られたデータを集積した結果、英語指導力を保証するための英語運用能力の下限が、VELC Test の620～640点ではないかというおおよその見当がつけられた。この点数は本プロジェクト【1年次】の考察より大きな変化はなかった。「英語運用能力」と実習評価から見られる「英語指導力」の相関に関する考察は以下の通りである。

- 英語運用能力が高い実習生に対しては、授業指導に関する英語を直したり、練習する時間がかからないので、活動の質の向上や細かい指導技術までに指導が及んで、全体的な授業の質は高まった。

- ある程度の英語力がある実習生のみならず、英語力に自信のない実習生でも、生徒との対話力、明快な指示、教材研究に対する姿勢、生徒の興味を引く題材などの活用、授業実践を重ねる中での反省・指摘を次に活かそうとする態度も、英語運用能力を補完する「英語指導力」として、総合評価が高くなった要因であった。
- 英語の運用に問題がある実習生は、英語ばかりを指導することになり、授業の細かいところまで指導が行き届かず、授業全体の完成度が下がる傾向にあり、総合評価も低くなる傾向が見られた。
- 英語力はあっても、教材研究が不十分であったり、指導計画の立案に丁寧さが欠けた場合は、総合評価が低くなった。

4. 2 附属国際中等教育学校

【1年次】

ばらつきが見られた原因として、一部に英語運用能力は比較的高いにもかかわらず、英語指導力があまり振るわなかった実習生がいたことが挙げられる。指導教諭からは「教員と、また生徒ともコミュニケーションがとれていない。」ということが、指摘された。当該の実習生のデータを除いた母集団で相関分析を行うと、中程度の相関があることになり、生徒理解などの生徒への対応がある程度できていれば、英語運用能力が高い実習生ほど、より高い英語指導力を期待できると考えられる。

また国際中等教育学校では、同一の実習生が中学校課程、高校課程を実習期間中に指導するケースがある。このような学生のうち、ある学生について、「あまり英語が得意な学生ではなかったが、中学生の授業では、クラス・マネジメント力が問われるため、あまりうまくいかないこともあったが、高校ではしっかり授業準備をして、比較的うまくいくこともあった。」という報告もあった。

【2年次】

VELC Test の得点が630点台～730点台の学生（4名）の評価合計平均が15点中13点であるのに対して、530点台～560点台（4名）は15点中10点というように、相関関係が見られた。

英語の運用能力が高い学生についての実習指導教諭のコメントには「説明がわかりやすい」、「生徒への適切な対応や的確な指示ができる」というものがあった反面、VELC Test では高得点（630点台）の学生でも「インタラクティブな授業展開というよりは教師一人で授業をして」いるという部分で、授業方法に改善が望まれるケースもあった。

VELC Test の得点が比較的低かった学生に関するコメントとしては、以下のようなものがあった。

- 英語で指示を出すことはできていたが、説明になると通じていないことがある。そのため生徒の中に入って活動を活性化するところでも難しかった。
- 教授法の知識はあるが、生徒のニーズと一致させることが困難であった。
- 英語力自体はそこまで高いわけではなかったが、真面目に取り組み、練習を繰り返すことで英語力とのギャップを埋めることができていた。
- 検討会で出た反省点をしっかり振り返り、他の実習生と熱心に練習を繰り返していた。その甲斐あって、少しずつ授業運用力も身につけることができた。

【3年次】

実習生のVELC Test の得点は、本稿で言及した英語指導力を保証するための英語運用能力の下限であるVELC Test の630～640点を超える点数を、全員が示していた。VELC Test の得点が690点代の実習生の実習総

合評価は15点中12点で、700点以上の実習生の総合実習評価は15点中13点～15点とある程度の相関関係が見られた。全体として、本校で実習した生徒は、英語運用能力は平均して高い実習生であった。そしてそのような学生は、英語によるインストラクションや授業運営が十分できていたと評価された。つまり、英語による授業運営が問題なく実践できるためには、最低限の英語運用能力が必要ということである。よって、実習生の指導力に求められる要素の一つは「VELC Test では630～640点程度の最低限の英語運用能力」である。英語運用能力は、たとえ高い指標に到達していなくても、授業実践の経験の積み重ね、事前の入念な準備、模擬授業等による反復練習等の学習の姿勢により補うことが可能であると述べたい。

英語運用能力以外の「英語指導力」に必要な要素として、生徒の興味・関心・目標に合わせた教材研究と独自の教材開発、指導計画の立案、生徒とのインタラクション、実習生自身の振り返りと指導教諭からの助言をいかに次の授業へとつなげることができているか、が挙げられた。これらの評価観点をよく事前に指導教員は確認し、その各観点目標を目指すような実習指導を行わなくてはならない。学生に多様な体験をさせつつ自らが学ぶ機会を与える。実習学校の3週間のみならず、大学での事前学習での教育が大きな役割を果たしている。

4. 3 附属高等学校

【1年次】

「3. 結果」で述べた相関分析の結果で負の相関が見られたことについての考察は以下の通りである。

附属高校の4人の実習生のうち、VELC Test の得点の最低点が741点であったが、この実習生の得点をTOEIC 相当点に換算すると、760点であり、決して低い英語運用能力ではない。この4人は、英語運用能力の点では比較的高いと言える。他にVELC Test の得点が700点台後半であった実習生が2人おり、この3人は実習中の英語指導力に関する評定の合計は同じ点数であった。一方で最高点を出した実習生が、実習中の英語指導力についての3項目では、他の実習生に比べ、低い評定を受けていた。このことが英語運用能力と英語指導力の相関分析で、負の相関の要因であると考えられる。

【2年次】

実習生の英語力は比較的高い（6名中5名がVELC Test 700点台後半～800点台前半）。実習の評価も全体的に高め（15点中11～12点）である。実習指導教諭のコメントからも、実習生の英語力に関する不安は感じられず、むしろ毎回の反省を生かして次の授業に備えるという、実習に取り組む姿勢に対する評価が多かった。

【3年次】

VELC Test の得点は600点前後から800点台と、ばらつきがある一方、実習の評価は15点中の11～12点の評価が最も多い。全体としては中程度の相関関係が見られる。

実習評価の最高点15点を得た唯一の実習生（VELC Test 693点）は、生徒の興味・関心を持たせる工夫をし、授業の目標を明確にしており、指導計画、配付教材の準備などあらゆる面で優れており、生徒に伝わる授業を行っていた。明瞭な英語を用いて自信を持って授業を進めていたのは、一つには入念な準備、また一つには基本的な英語力が考えられるが、この自信を支える英語力としては、必ずしもいわゆる最高水準（例えば800点台後半など）である必要はないと考えられる。

一方、VELC Test で比較的高得点（800点超）の実習生は、教材の理解はよくできていたが、教材や単元の意図についての考察が十分ではなく、生徒の視点を考えるという意味で、改善の余地がまだあった。その意味では、英語力があるレベルを超える実習生の課題は、いかに生徒の立場に立って指導するかに尽きるだろう。そこで実地の経験を積むために教育実習があるのだから、実習生を指導する側としては、実習生に、語学力だけでは

カバーできない、本質的な部分を気づかせるということが求められるのだろう。

5. 大学の教育実習事前指導のあり方

本学では、大学3年次に実習生を各附属学校へ送り出している。実習生は、附属学校の教員から指導・助言を受けながらも、教壇ではひとりの「教師」として、生徒たちの英語の学びを確かめ豊かなものとし、英語学習に対する意欲・関心を高めていく授業をすることが期待されている。それゆえ、そのような期待に沿うよう、教育実習に出かける前に学生たちの英語運用能力、とりわけ「英語教師に必要とされる英語運用能力」、ならびに英語指導力を向上させておくことが、実習生を送り出す大学側の責任であり、使命である。以下では、学生たちを教育実習に送り出す前の段階での大学における英語運用能力および英語指導力向上の取り組みの現状について概説し、次に本研究結果を踏まえての今後の課題について考察する。

5. 1 実習に送り出す前の英語運用能力と英語指導力向上のための取り組みの現状

大学においては、専攻を問わず全ての大学1年生が、教育職員免許法上の科目（外国語コミュニケーション）として履修する「英語コミュニケーション A」、「英語コミュニケーション B」（それぞれ半期1単位）に加えて、英語を専攻する学生の英語運用能力・指導力の向上に資する「教科に関する科目（英語コミュニケーション）」として、大学1年次に「英語読解Ⅰ」、「英語読解Ⅱ」、「英作文Ⅰ」、「英作文Ⅱ」、「英会話Ⅰ」、「英会話Ⅱ」、大学2年次に「英作文Ⅲ」、「英作文Ⅳ」、「英会話Ⅲ」、「英会話Ⅳ」（それぞれ半期1単位）を履修させている。

従来から大学では、英語を教えるためには高度な英語運用能力が欠かせないものの、「高い英語運用能力を持つこと」イコール「英語を効果的に教えられること」ではないと考えてきた。優れた英語教師になるためには「英語教師に必要とされる英語運用能力」が必要であり、その能力とは、目の前にいる生徒の英語運用能力に応じて、自由自在に自らが使う英語のレベルを調整でき、生徒の英語習得に役立つ理解可能なインプットを適宜与えることができる能力ではないかと捉えてきた。

この「英語教師に必要とされる英語運用能力」は、「教職に関する科目」に位置づけられる「中等英語科教育法Ⅰ」（2年春学期、2単位）、「中等英語科教育法Ⅱ」（2年秋学期、2単位）、「中等英語科教育法Ⅲ」（3年春学期、2単位）、「中等英語科教育法Ⅳ」（3年秋学期、2単位）の授業内で鍛え上げる。「中等英語科教育法Ⅰ」と「中等英語科教育法Ⅱ」では中学校における英語の指導法、「中等英語科教育法Ⅲ」では高等学校における英語の指導法、「中等英語科教育法Ⅳ」では第二言語習得論を扱う。これらのうち、「中等英語科教育法Ⅳ」を除く3科目は、附属学校での教育実習の前に履修を終えることになる。いずれの科目も学生を教師役として教壇に立たせ、残りの学生が生徒役となるマイクロ・ティーチングを授業の中心的な活動として行っている。実際に中高生が現在使用している検定教科書を教材として用い、教師役の学生には「英語を英語で教える」ことを要求する。彼らは実演を通して、事前の教材研究の重要性や、生徒のレベルに応じて教室で使う英語のスピード調整をしたり、繰り返したり、言い替えたりする Teacher Talk の難しさを痛感する。マイクロ・ティーチングの様子はすべてビデオ録画し、学生が後日自身の授業を客観的に振り返ることができるようにする。このような振り返りは彼らの英語運用能力および英語指導力向上のための意欲を喚起するものとしても極めて重要である。

教育実習前に学ぶこのほかの必修科目としては、「英語科教材論Ⅰ」（2年春学期、2単位）、「英語科教材論Ⅱ」（2年秋学期、2単位）、「英語科カリキュラム論」（3年春学期、2単位）などがある。教材論の授業では、実際に教材開発を行う。想定する生徒の学年や英語運用能力に応じて教材の難易度を調整するために、オリジナルの英文をより生徒の手の届くレベルの英文に書き換えたり、リスニング教材として自分が録音した英語の音声客観的に聞いたりすることで、自らの英語運用能力のメタ認知の促進に役立てる。「英語科カリキュラム論」の授業は、研究開発学校や SELHi 校などの特色あるカリキュラムの事例研究をした後に、学生たちが理想とする実践

的カリキュラムの開発にグループで取り組む。このような取り組みを通して、英語授業をよりマクロな視点で考察するための視点を養い、英語指導力向上に役立っている。

教育実習科目の「事前・事後の指導」も本学では教科単位でクラス分けがされており、英語科に特化した指導が可能である。大学3年次春学期の「事前の指導」では、半年後の教育実習に備えて、附属学校の教諭を実地指導講師として大学へ招き、附属学校の生徒たちの実態や実習生として教壇に立つ上での留意点などについて指導してもらっている。

教育実習直前の夏休み期間中に集中授業科目として開設されている「英語指導実践演習」は、これまで紹介してきた必修科目とは異なり選択科目ではあるが、学生たちの英語運用能力および英語指導力を集中的に鍛えることを意図したユニークな科目である。本学の一般学生向けの英語科目として夏休み期間中に1週間集中で、朝から夕方まで日本語は一切禁止、英語漬けの環境の中でスピーチやディスカッションなど多様な活動を行う「英語集中演習」という科目があるが、「英語指導実践演習」はこの「英語集中演習」を担当する大学教員のTA (Teaching Assistant) として働き、その「働きぶり」に対して単位が与えられるという科目である。TA といっても「英語集中演習」の活動・教材の企画・作成などの授業準備にも年度初めから関わり、演習中も担当大学教員と共に履修者へ英語で適切な指示を出し、履修者一人ひとりの英語運用能力を引き上げるためのきめ細かい指導を行うことが要求される。まさに「英語教師に必要とされる英語運用能力」と英語指導力の両方を鍛えることのできる科目といえる。

以上が附属学校での教育実習に学生たちを送り出す前の大学での学びの概説である。教材作成やマイクロ・ティーチングなどの実演を徹底的に行い、自らのパフォーマンスをふりかえる作業を繰り返すことで、一般的な英語運用能力とは異なる「英語教師に必要とされる英語運用能力」と英語指導力を同時並行的に鍛えていく。

5. 2 本研究結果を踏まえた大学での教育実習事前指導の今後の課題

実習生の英語運用能力と英語指導力との関係を探った本研究の結果からは、両者の間に中程度の相関があることがわかり、英語指導力を支える英語運用能力、英語運用能力に裏打ちされた英語指導力を獲得することの重要性が示唆されたと言えよう。英語運用能力が十分でない学生は、教材研究や指導案作成の段階からすでに大きな問題を抱えていることが、本研究の調査からも明らかとなり、それが彼らの実習生としての英語指導力の評価が低い一因となっている可能性も示唆された。

現行の学習指導要領には、高等学校において「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」ことがすでに明記されている。また文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013年12月13日)や、「英語教育の在り方に関する有識者会議」(2014年9月26日)などからは、今後、中学校においても「授業を英語で行うことを基本とする」方向性が示されており、近い将来、中高の英語教師として教壇に立つ実習生の英語運用能力の向上に、実習の事前の段階から大学がこれまで以上に力を注いでおくことは必須と言えよう。本学の英語科としても、実習生の英語運用能力向上のための取り組みを一層強化させると同時に、彼らが英語運用能力向上を英語検定試験などのスコアを伸ばすだけの単純なものとして捉えるのではなく、「授業を英語で行うことができる英語運用能力」獲得に向けて、自律的に学習に取り組めるように環境を整えることが課題となる。

また、本研究によって、実習生の英語運用能力が十分高いところまで到達してくると、生徒や実習指導教員とのコミュニケーション能力や実習生として真摯に学ぶ姿勢といった個人差が、英語指導力の差としても現れるようになることも明らかになった。大学での教育実習事前指導においても、学生たちが他者の意見や多様な価値観を尊重し、さまざまな個性・能力を有する生徒に実習生として向き合うことになる自身の長所・短所を冷静に省察し、優れた対人コミュニケーション能力を身につけられるような取り組みが今後重要になると思われる。その

ためにもこれまで以上に、授業アイデアの試行・検討を協働で行ったり、省察の機会を頻繁に持たせたりすることで、実習生個々の学びと集団での学びとを結びつけ、教育に関わる人としての人間性を高めていけるような学びをうまく設計していくことが必要であろう。

(注) 本稿で紹介している大学英語科の取り組みは、平成26年度までの旧カリキュラムの下で行っていたものである。平成27年度からは新カリキュラムとなり、本稿で紹介した「英語科カリキュラム論」の代わりに「英語教育の現状と課題」、「第二言語習得」などの新規科目が開設されている。

6. 結論

英語科の実習生に英語指導力を保証するためには、ある程度までの英語運用能力が必要であり、下限はVELC Test の得点で630～640点であることがデータによって裏付けられた。しかし、ある一定の英語力を超えると今度は、生徒への対応や指導教諭の助言を受け入れてどう改善していくかなど、コミュニケーション力や人柄に支えられる部分も大きいことも確認された。特に、実習中に、毎回の反省をいかに次に生かすかという部分で、評価につながる学生が多いことから、最終的には「学ぶ力や姿勢」が重要な要素であると言える。

また、実習生本人がもつ資質以外にも、教育実習以前における授業の計画・実践経験の豊富さや、教育実習に際しては、事前の入念な準備、模擬授業等による反復練習等が、実習生の英語運用能力を補う方法として有効であると言える。

3年間にわたるプロジェクト研究の結果、実習指導にあたっての英語運用能力の目安が明らかになった。また本研究を通して、実習生の「英語運用能力」と「英語指導力」向上のための効果的な指導方法について、大学と附属学校が連携して検討し、情報を共有することによって、今後どのようにして大学での教育実習の事前指導・事後指導内容に生かしていくべきか、課題が明確となった。

参考文献

- 外国語能力の向上に関する検討会 『国際語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～』（2011年6月）
- 静 哲人 望月正道 『熟達度診断のためのVELC Test ～信頼性と妥当性を検証する～』（2013年1月）
- 神保尚武（研究代表者）『平成17年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）（1）英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究』JACET 教育問題研究会（2006年3月）
- 附属学校研究プロジェクト研究（英語部会）『教育実地研究生の英語運用能力と英語指導力との関係を探る～各校における教育実地研究の現状調査をもとに～』東京学芸大学附属学校研究紀要第41集（2014年12月）
- 附属学校研究プロジェクト研究（英語部会）『教育実地研究生の英語運用能力と英語指導力との関係を探る～各校における教育実地研究の現状調査をもとに～』東京学芸大学附属学校研究紀要第42集（2015年12月）
- 山崎朝子 『調査報告2-2 英語科教職課程の現状と課題』武蔵工業大学（現東京都市大学）環境情報学部紀要（2006年2月）
- VELC TEST Visualizing English Competency Test, <<http://www.velctest.org>>（2016年1月28日参照）

東京学芸大学教育実習成績報告書

様式07-1

実習校種/教科	配当学級	教育実習生所属 (学生番号)	教育実習生氏名
	年 組	類 選修() 専攻()	

※太枠内のみを教育実習生が記入して指導教諭に提出

実 習 期 間	出席すべき日数	出席日数	欠 席 日 数 (理 由)	遅刻・早退
平成 年 月 日 と			病 欠 日 ()	遅刻 回 早退 回
平成 年 月 日から	日	日	事 故 欠 日 ()	
平成 年 月 日まで			そ の 他 日 ()	

評 価 項 目	主 な 観 点 例 (優れたものに○、劣るものに△、評価しなかったものには/)	所 見 (評定が5または1の場合に記入)
I 教材研究	()教科書等の分析・活用	
	()学習指導要領および学校指導計画等の検討	
評 定	()興味・関心に応じた教材の開発・工夫	
	()単元設定理由の明確化	
5 4 3 2 1	()教科内容に関する専門性	
	() ()	
II 指導計画の立案	()本時の目標と評価の明確化	
	()目標に応じた学習指導過程の構想	
評 定	()発問・助言等と反応予想の明確化	
	()資料・教具・機器等の準備、板書計画等の立案	
5 4 3 2 1	() ()	
	() ()	
III 学習指導と評価	()音声・言語・文字等の明瞭さ、正確さ	
	()受容的、応答的な姿勢	
評 定	()児童・生徒の反応への適切な対応	
	()資料・教具・機器等の活用、効果的な板書	
5 4 3 2 1	()授業中および授業後の適切な評価活動	
	() ()	
IV 生活指導と児童・生徒理解	()生活場面での児童・生徒との関わり	
	()学級指導および教室環境への配慮	
評 定	()観察に基づく個と集団の課題把握	
	()道徳・特別活動への参加	
5 4 3 2 1	() ()	
	() ()	
V 勤務態度と実習への意欲	()出勤の状況(無断欠勤、遅刻等)	
	()指導案・日誌等提出物の提出状況	
評 定	()協同的な姿勢・コミュニケーション力	
	()人権等への配慮と規範意識	
5 4 3 2 1	() ()	
	() ()	
合計()点	評価の基準→A: 25-21, B: 20-15, C: 14-12, D: 11-10, F: 9-5 (Fは不合格)	
総合評価・所見	A・B・C・D・F (Fは不合格)	報告書作成日:平成 年 月 日

学校名	指導教諭氏名(学級)	Ⓜ
校長名	指導教諭氏名(教科)	Ⓜ

(注) 本研究では、実習評価項目のうち、「I教材研究」、「II指導計画の立案」、「III学習指導と評価」の3項目の評定の合計点15点を、実習生の「英語指導力」を表す数値として使用した。

東京学芸大学附属○○○○○学校 平成○○年度教育実習生 VELC Test/英語指導力(実習評価) 分析シート												
所属	学籍番号	学生氏名	実習年月	VELC TEST	TOEIC 相当 点	教材研究	指導計画 の立案	学習指導 と評価	評価合計	生活指導 と児童・ 生徒理解	勤務態度 と実習へ の意欲	コメント (実習中の取り組みや様子等に関する欄外データ)
1 B 類英語		学芸 太郎	平成24年9月	640								
2 B 類英語		学芸 次郎	平成24年9月	680								
3 A 類英語		学芸 三郎	平成24年9月	750								
4 A 類英語		学芸 花子	平成24年9月	580								
5 A 類英語												
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15												
16												
17												
18												
19												
20												
21												
22												
23												
24												
25												